●社会知性開発コース●　海外でインターンシップと社会貢献

本学には、海外で語学の習得とともにインターンシップや地域・社会貢献活動、自然環境保全活動を体験する「社会知性開発コース」がある。ニュージーランド・ワイカト大学（中期留学）での「インターンシップ」体験と、米国サスクェハナ大学（夏期留学）の「アメリカ文化とサービスラーニングコース」に参加した４人に体験記を寄せてもらった。

体験記

インターンシップ体験

オークランドの免税店で英語で接客、購入してもらった

ニュージーランド　ワイカト大学　島村　佳子（文３）

4月から7月末までの4カ月間、ニュージーランドに中期留学をしました。私が今回の留学を決めた理由は、英語力の向上はもちろんのこと、留学プログラムの中で唯一の社会知性開発コースという、インターンシップを体験することが出来ることです。就職活動に留学先での体験を生かせると思い、迷わず留学を決めました。

▲　中央が島村さん

ニュージーランドに到着してから最初の3カ月間は、ハミルトンにあるワイカト大学の語学学校で英語キルアップを目指して、それぞれのレベルに応じたクラスに入りました。また、語学学校には、世界各国から数多くの留学生が英語を学びに来ているので、日本人以外の留学生とも積極的に交流することが出来ました。彼らと過ごした3カ月で自分の視野が広がったように思います。

ワイカト大学での3カ月間の語学研修を終えた後オークランドに移動し、7月から1カ月間、インターンシップを経験しました。それぞれの英語力と希望に応じて派遣先が決定され、私の派遣先は、免税店大手のDFS GALLERIAでした。

ここでの主な職務内容は、接客販売、商品のプロモーション、レセプションでの事務業務、そしてストック管理などでした。オークランドのDFSで働いているスタッフの多くは中国人や韓国人ですが、彼らは英語だけでなく日本語も流暢（りゅうちょう）に話すことの出来る多言語使用者で、彼らの優れた言語能力に驚くとともに、自分も将来は彼らのようになりたいと思いました。

インターンシップ期間中には、大変な仕事もありましたが、実際に外国人のお客様を相手に英語で接客し、商品を購入してもらえたときには本当にうれしく、自信につながりました。

初めて海外の企業で働くことが出来るということで、当初は多少の不安もあったものの、毎日少しずつ新しい仕事を教えてもらえるのがうれしく、あっという間の1カ月間でした。

私は4カ月間の留学を終えてニュージーランドから帰国し、日本での就職活動を本格的にスタートさせますが、インターンシップを経験して自分が将来何をやりたいのかきちんと見据えることが出来たと思います。

ツアー会社でガイドに同行　プロ意識と責任感学ぶ

ニュージーランド　ワイカト大学　熊谷　純一（文３）

ツアー会社で1カ月間インターンシップをしました。主な業務は空港、ホテル間の送迎とツアー同行でした。

送迎ではまず事前準備に悪戦苦闘しました。普段聞きなれない業界用語を理解しながらで、初めのうちはひたすらメモをとりながらの準備でした。飛行機の便の遅れや早まりがないかを直接、空港の案内センターに電話をかけ、ガイダンスに従って確認するのですが、その際は、電話越しの英語に苦労しました。

いよいよお客様との対面。ここからはガイドさんのサポートをしつつ、その働きぶりを見て学びました。「対面」から車への誘導、日程の案内やニュージーランドの概要説明などすべてがスムーズで感激しました。何度も同行しているうち、お客様と話す内容を相手に合わせてうまく変えていることに気づき、感心しました。客層もさまざまで、それに合わせたガイドが必要ということです。ツアー同行ではお客様の出迎えから解散まで、ガイドとしてどう動くかを学ぶと同時に、ガイドさんたちからプロ意識の高さを見せつけられました。ツアー中は、常にお客様に目を配り、ガイドの内容もお客様の興味に合わせて変えました。

▲　ツアーに同行した熊谷さん（右端）

また、ツアーにはトレッキングからワイナリーめぐりや、『ロード・オブ・ザ・リング』や『ナルニア物語』のロケ地を巡るツアーなどさまざまあり、どのツアーに行ってもガイドさんのガイドは完璧で、ツアー中不意に聞かれることにもすらすらと答えており、その知識量には驚かされました。事前準備、時間管理の徹底はもちろん、お客様へのきめ細やかな配慮、気配りも徹底されていて、これがプロなのだと思いました。

私がツアー終了ごとに提出したレポートへのコメントからも彼らの仕事への熱意や責任感の強さ、プロ意識を感じ、「働く」とはどういうことかを改めて深く考えさせられました。

私自身がツアーガイドのサポートをして感じたことは、「やりがい」です。ツアー中のお客様の笑顔や、ツアー解散時に頂くお客様からの感謝、満足の言葉が激励となり、この仕事へのやりがいを感じました。将来は、プロ意識と責任感を持ち、人を喜びや満足につなげる仕事をしたいと思います。

アメリカ文化とサービスラーニングコース

商店でインタビュー　英語を英語で説明する難しさ

米サスクェハナ大学　大貫　千穂（商３）

大学3年次になり、商学部のグローバルアクティビティという授業の説明会をきっかけに、サスクェハナ大学留学を決意しました。たった19日間でしたが、今後の何十年という人生に生かされると思います。

▲　インタビュー先の商店で。座っている左端が大貫さん

サスクェハナ大学の魅力は、社会知性開発コースということで、サービスラーニングのプログラムが多く組まれていることです。教室での授業ではなく、ボランティア活動や現地の人たちに直接インタビューをする課外活動を行い、その活動を通して、アメリカの文化・歴史、習慣などを学ぶことができました。その中の2つの活動について紹介します。

1つ目は、ファーマーズマーケットです。ペンシルバニア州はのどかな田舎町で、大型スーパーもあれば、農作物の直売をやっている小さい店もいくつかあります。私たちが訪ねたルイスバーグのマーケットには、この地域の畑一面に広がるとうもろこしなどの新鮮な野菜や果物、肉、魚、チーズ、洋服、植物、日用品まで、さまざまな商品が並んでいました。私たちは課題で与えられた食材を探したり、店の人にインタビューしたりしました。マーケットの人々はフレンドリーで陽気な人ばかりでした。

2つ目は、ルイスバーグの商店街でのウオーキングアートツアーです。ジュエリー、キャンディー、絵画、ブライダル、ポストカードや日本のものを売っている店など、さまざまな店があり、それぞれグループに分かれて歩いて探しました。店の人と会話をして、インタビューもしました。

経営上重視していることや努力していることなど、マーケティング学科の学生としての目線で質問出来たことは、日本とアメリカの小売業者の共通している点や相違点を知るいい経験になりました。

サービスラーニングでは、直接質問することが多くありました。今までの私は、わからない単語は電子辞書で調べて文を作っていました。日が経つにつれて、知っている簡単な英語で、いかに自分の考えを伝えることが出来るかということが大切だと学びました。英語を英語で説明することは、今まで考えてもいなかったことで、留学で得られた大きな経験です。

留学に対する高い意識を持った仲間はもちろん、ホストファミリー、さまざまな職種や年代の人々、アシスタントの方々など多くの人たちとの出会いがありました。この出会いと貴重な経験は、私にとってかけがえのない財産です。今回の留学は、アメリカの文化・歴史を知るだけでなく、英語に対する価値観も変え、新たな自分との出会いでもありました。

教室から外へ出て　〝生〟の英語の世界に

米サスクェハナ大学　遠藤　晋哉（文２）

英語英米文学科の学生として「英語」という第二の言語を学んでいく上で、これから長い付き合いになるこの言語をより効果的に学習するためのキッカケにしたいと考え、夏期留学プログラムに参加しました。

社会知性開発コースは、教室から実際に外へ出て、現地の人々と会話をすることによって英語を学んでいくというものです。日ごろ私たちが日本で受けている授業とはまったく異なったものです。このコースは、テキストや配布されるプリントは少ないです。コースを十分に活用するためには、日本語が通じない、顔の形や肌の色など外見がまったく異なり、考え方や感じ方が違う人々の中で、「日本人」の殻を破り、「積極的に」学ぶ姿勢が、特に必要と感じました。

▲　ホストファミリーと。後列左から３人目が遠藤さん

中でも、大学の近くにあるチルドレンセンター（日本の保育園にあたる）で交流をしたときのことが印象に残っています。そこでは、子どもたちに新聞紙で兜を作ってあげたり、飛行機や鶴を折り紙で折ってあげたりしました。

日本の文化である折り紙を英語で伝えるのは難しく、さらに子どもたちといっても「ネーティブ」である彼らの英語を話す速さに驚き、必死になって聞き取り、こちらからも積極的に会話を楽しもうと行動したのを覚えています。

授業の一環ということは頭にありましたが、やはり机に向かって黒板をみて時間を過ごすのとは違い、新鮮かつ刺激的な時間であったことに違いありません。そして普段と違った状況で学んだすべての事柄は、私の心と体に深く刻まれ、消えることはないでしょう。

また、チルドレンセンターの子供たちや先生方からは、私たちの決してスムーズとはいえない英語をなんとか理解しようという思いと、少しでも分かりやすく伝えてあげたいという思いが伝わってきました。

恵まれた環境で、英語を通じ人間的な温かさを経験することが出来ました。